

みかいふう

未開封

馬場駿

このところ毎晩のことだが施設の消灯時刻がきても眠りの中に入れず昨夜も夜半になってやつとそれが叶ったらしい。午前五時、目覚しの音で「まあ充分かな」と、ゆつくりと起き上がると微かに雨音が聞こえた。ベッドサイドの小さな棚から耳掛け式の補聴器を取ってから床に降り、寢間着姿のまま車椅子に乗った。また全く歩けなくなつたという訳ではないが、脚の筋肉が持久力に乏しく五分と持たずに立ち続けることさえ危うくなってしまう。施設内の医師によれば筋萎縮症の一種で症状は時が経つにつれて悪化するらしい。所見になる小難しい病名は未だに憶え切れないでいる。何度聞いてもすぐに忘れるのは脳が覚えることを嫌っているからだろう。忘却力を味方にして絶望を回避している。薫は、自分自身でそう解析している。病気が筋シストロフィーの仲間だとすれば行

きつくとところは想像がつくからだ。

サッシ戸のカーテンを右に左にと分けて引くと部屋中の白いビニールクロスが一面に明るく膨れ上がった。外は篠突く雨、風がないらしく雨は真つ直ぐな線を引いて降り続けている。そういうえば前回の俳句の会で「雨脚」(あまあし)という言葉の意味を知ったばかり、早速実際に自分の目で確かめられたのは幸運と言つべきか。数えきれないほどの雨の糸が目の前にある。

「もう少し音が欲しい」そう口にするのと立って数歩進みサッシ戸を十センチほど開けた。外に出たときと同じ音量なのではないか、じつに刺激的だったので、車椅子に戻ると目を瞑った。いかにも梅雨といったシトシトと降る雨は気が滅入るので嫌いだ、沛然と降る雨の音は好きだった。

「濡れるよ」

振り返ると隣のクラスの柏原委員長が傘を高く上げている。「入れば」と笑顔もくれた。

「いいんですか、級長がナンパなんかして」と余裕を見せると、「中三で相合傘だなんてめつたに経験できないぞ、はやく来いよ」と偉ぶる。少し楽しくなった。ずっと前か

ら遠目ながら意識していた男の子だ。もう飛び込むしかなかった。そうとなれば彼の脇にピタリと付いて左腕を彼の背に回した。

「まるで恋人みたいだなア」

「またあ、声さえ掛ければ誰でも自分になびくって思ってるんですよ」

「そう思わなきや声掛けられないだろ、立花さん」

「じゃあ、なびいたって思ってた」言ってから少し調子に乗りすぎたかなと悔いて「でもさあ、半分ずつ二人とも濡れちゃってるけどいいの」と話の方向を変えた。

「さつきみたいな場合さ、一人だけ傘をさして一人はずぶぬれ、二人で傘をさして二人とも半分濡れ、傘を閉じて二人ともずぶ濡れという三通りしかないじゃん。薫さんならどれ選びたい」

二度目の呼びかけは嬉しいことに下の名前を使われた。これは偶然の出会いではないのかもしれない。

「いま、こうしてるのがいい」

「じゃ解決だ、このまま君の家まで送る」

あのときはあのこと、十年後の彼は一人で傘をさして急ぎ足で去った。

急に雨音が小さくなったので薫は、車椅子を降りてサッシ戸を締めようとした。見えていなかった石畳の先の植栽がはつきりと見え、ひときわ目立った白い色は、だらしなく花びらを上げた梔子(くちなし)だった。勢いは落ちても雨粒自体は大きく、いい加減に花を落とせと云わんばかりに梔子を叩いている。打たれて情けなくお辞儀を繰り返す花は惨めそのもの、見るに絶えず戸をしつかりと閉じた。「まるで今のわたし?」言葉にしたとたん目頭が熱くなり、車椅子に戻るやフツと笑いながら即興の句を創って自分から逃げた。「色香失せ黙(もた)す梔子雨浴びる」

入口のドアがノック音と共に開いて看護師の野田が入ってきた。「ごめん、今朝のバイタルちよつと早いけどいい」

「いいもなにもお仕事でしょ、車椅子のままでいいのかな」と応しながら両の掌で顔を擦った。二十代の男に涙目と気づかれるのはまずい。「まだ顔も洗ってないの」

「充分綺麗」

「らっ、婆をからかうな、半世紀早い」

この少し女っぽい青年は、一見頼りなきそうだが仕事

はできると評判の子だ。馴染みの田村喜美子介護士の情報によれば彼は何かと対応が難しい入居者はかり担当させられているらしい。「と、いうことは……」とからかうと彼女は慌てて「あ、三段論法ですか、ごめん、うつかり」と可愛く慌てた。

「体温、血圧、心拍数オーケーです、何か気になることは？」訊きながら青年の足先は扉に向いている。苑内で突発的に忙しくなる事件があつたのかもしれない。朝に体調を崩す高齢者はかなりいる。

「そうね、君のことが少し」と軽くいじつた。

「僕の精神状態なら不安定で不健康。さすが薫さんは名医だ、じゃ行くね」

作り笑顔の達人は右掌をふりつつ出て行つた。

朝食の時間まで小一時間はある。それまでに髪を整え、薄化粧を施し、外出着に着替えておく。自室を出ればそれは世間でいう外出と変わらないというのが薫の考え方だ。中廊下は車椅子同士が余裕で擦れ違えられるようにと幅広く、食堂は都会のレストランと見紛うほど、フロントロビーも中堅の観光ホテルと比較しても遜色はない。そこを寝起きのまま動き回る入居者、患者は確かにいるし

特に咎められることも無いが、だからといって真似をしようにとは思わない。だいいち規模の大きな老人ホームである「こだま苑」のこと、どんな面会人、訪問者と出会うか分らないではないか。姿かたちは衰えたが少なくとも清潔感はある。そうありたいのだ。

ここ「こだま苑」は關所直前まで「ホーム木霊苑」と称していたらしいが、初代でかつ現在も苑長である内科の老医師が着任するとすぐ老人ホームである施設名に死を連想させる霊の字をそのまま使うのは不適切として仮名にしたうえホームの表記も削除させたという。旧来の老人ホームのイメージを壊したいというのが口癖だったらしい。ろくに入苑案内も視せずに入居を決めた薫は、介護士の他に相当数の看護師が棟別に配されているのには少しく驚いた記憶がある。加えて副苑長は大学病院で整形外科医だった経歴がある。入居費用が高いのにはそれ相当の訳があつたのだつた。入居時に支払つてみてつくづく実感したことは、入経路の如何にかかわらず金を多く持つている者が好い目を見るところという辛い現実だつた。その実感が嬉しさを伴わず我が身の前半生の哀しさを連れてくるのは何故なのか。薫は常にそれを問いかけられて

いるような気がする。

朝食を済ますとそのままロビーの片隅に行き、すつかり雨が上がりつつ日が差し始めた外を眺めていた。半年ほど前までは備え付けの新聞を手にして座つたものだが、いまは小さな活字が苦痛で止めている。いまさら政治経済社会でもないし、苑内で二三人はやつているとされる株式投資にもまったく興味が無い。万一儲かったとしてもいまの自分の体力と能力でいったい何に使えるというのか。法定相続人がほくそ笑むくらいだが自分にはそれから一人もいないのだ。

「薫さん、また来たよ、柏原さんの手紙」

後から来る声に車椅子を操って向きを変えると田村介護士が封書を差し出して半ば笑っている。

「これで六回目よ、確か。元カレなの？ 柏原裕司」

「キミチャンわるいけど、また捨ててくれる、見るのも触るのもイヤなのよ」

「いけれど規則で副苑長に渡さない」と

確かに新沼副苑長は入居者のメンタル面の担当医師でもありカウンセラーでもある。無許可で廃棄などすればそれは就業規則違反だ。薫にとってはやや苦手な存在で

もある。例えば面談にしてもこちらの本音や正体を見透かされてしまうおそれがある。鋭い人なのだ。

「そうして、お願い」と合掌して拝む仕種をした。

「はいはい、絵手紙の会の手伝いとか、泣いて愚痴る入居者の話し相手とか、いろいろお世話になつてる薫さんの頼みじゃ仕方ないけどさ。だけど、そんなにイヤなら受取拒否と封筒に書いて郵便屋さんを手渡ししたら？ きつと来なくなると思つよ」

「キミチャン、それじゃ意味が無いのよ」

明確な受取拒否も反応の一つであつて裕司を楽にしまふ。電子メールで済ますのを常にしてる今どき、手書きをして封書で連絡をしたのに宛先本人に届いたかどうか、届いたとして読んだかどうかも分らない状態で放置することこそが、ちっぽけではあつても裕司に対する復讐になるのだ。もちろん彼と私にしか解らない心の奥底の世界なのだが。

首を傾げながら去る仲良し介護士の後姿を見ながら、

「もしかしたら自分が一番偏屈で異常なのかもしれない」とそんな想いが顔を出し、「嫌な女になつたな」と首を疎(すく)めた。

それにしても一体何を知らせたいのだろうか、たしかに封書六回は穏やかではない。しかも彼の側は、その都度こちらが読んだと思つてははずだ。もう未開封のまま燃えるゴミになったか、それとも施設の焼却場で煙になったか、一通でも開封しておけば良かったかもと、またまた心の内で騒ぎが起つた。

「ちよつと庭に出てみようかな」と気分を換えた。

この施設の敷地には車椅子でも散策できるようにと、コンクリート舗装の道が縦横に走つている。まだ赤や白の百日紅(さすべり)はまだまだ蕾だがガクアジサイを含む数種類の紫陽花は満開で、あでやかさを競つている。樹々には幹に巻き付け、草花には根元に名札が付いているのも、記憶力が衰えている高齢入居者に対する配慮らしい。確かに名前を知っているだけで咲いている花々と親しくなれる。車椅子に腰掛けたまま思い切り顎を上げて豪雨一過のぬけるような青空を見た。それは何と丸い円であり、四囲の喬木のまだ深緑にもなりきらない葉の群れで縁どられている。

「ふつ、何て眩しいの、今日の一押しね」

思わず言葉にしたそのとき、聞き覚えのある女もどき

の声が出た。「立花さん、薫さん、副苑長がお呼びです」さらに名前を連呼して近づいて来たのは今朝一番に会話をした看護師の野田だった。

薫の車椅子は自走式兼介護式だ。理由は簡単で抱えている病が筋萎縮系なので重症化によって脚だけではなく腕にも萎縮が起るからだ。野田は後ろに回つて介護者用のハンドルを握り力強く押し出した。口はなよなよとしているが力はやはり男の強さだから速度は出る。

「薫さん、また男から手紙だね、昔話の中の彼氏かな」

「誰から聞いたの、それ」

まさか田村介護士や副苑長ではあるまい。そこは信じているが、気になった。

「誰だつて気づくわ。ポストマンは郵便物をまとめてフロントカウンターに置くんだよ、薫さん。それを見たら自分宛のものがなくどうか、誰だつて確認したくなるじゃない」

なるほど理屈だ、中には想像力旺盛な人間がいるだろうし人の口に戸は立てられない。

「それにしてもラブレターっていいなあ、僕は一度ももらつたことないんだ、憧れるなあ」

田村の口は止まらない。少し叩きたぐなつた。

「ラブレターの中身なんて所詮一時(いつとき)の感情の吐露、言い切つてしまえばただの気まぐれ、書いて投函したら、いつ消えてもおかしくない薄っぺらい告白だよ、有難がつてどうする。時が経てば書いた方ももらつた方も茶番だつたと気づき、一時恋もどきに酔つぱらつた自分の滑稽さに、涙さえ出して自分を嘲笑うんだよ」

「薫さん、何それ、自爆？ 怨念を感じる」

「うまいわね、そういう野田君好きだわ、あ、なに副苑長室に來なさいつてことだつたの？」

じつくり話すというなら嫌な予感がする、なにしろ口では勝てない相手なのだ。

野田はこれには応えずドアを開けて「お連れしました、僕は受け持ちのA棟に戻ります」と言った。

「野田君ありがとう、わるかつたね、薫さん、応接セットの方へ」と新沼副苑長は自分のデスクを離れた。

「時間をとつてもなんだから単刀直入に話すよ、ついさつき、田村さんから例の手紙を手渡された。受取拒否という対応もしない方針は変えないんだね」

「はい、それがしつこい相手に対する一番の応えです」

「むむ、差出人が見ず知らずの人間でないことは解つた、柏原裕司とは何者なの、入居前の元カレかな？ あ、いま喫茶から珈琲セットが二つ来るから気軽に会話しよう、薫さんはいろんな場面でスタツフのために動いてくれているんだつてね、数人から聞いている、ありがとう、うちのスタツフは比較的若者が多いから、入居者とは言葉をはじめ文化的に共通という大事な部分が欠けている。本当に助かる。もつと早くこうしてお話をしたかつたんだけどね」

「先生、お忙しいから大変ですよ。機会をつくつていただいて感謝します。ただ、いまのご質問は完全なプライバシーですので、ご勘弁を」

話したくない過去がある。答えることがこれからの自分のメリットになるなら別だが世間話的に語るのは嫌だつた。

「うん、話すことに意味があると感じたときはいつでもお相手をするよ。じゃあ、少しだけアドバイスをしたい、聴いてほしい。あ、来たね、喫茶から。こっちのテーブルに頼む」

何故コーヒー好きを先生が知っているのか、この年

寄りを知る限りほとんどお茶なのだ。本当に侮れない人だと改めて思った。

「ブルマンとはいかないがキリマンを淹れてもらった。血糖値の件があるから甘いのは避けてチーズケーキをたのんだ。さあ、お茶しよう、薫さん」

そう言いながらテーブルの下から先生は封書の束を取り出した。

「飲みながら食べながら聞いてください」

何を助言しようというのだろう。少し身構えた。

「最初から五回目までの封書はきつちり一週間を開けて出されています。なぜ一週間か、これは彼が書いて投函し、それがあなたの元に届いて読んで、返事を書いてもらって自分に戻るまでの最短時間だと僕は踏んだ。つまりあなたは彼から手紙を貰えばすぐに返事を出す人だと信じているわけです。そういう関係性があつた一人ということになる。ところが今回の、六回目の手紙は前回から三週間も空いて出されています。六通とも封書の裏の差出人のところに日付が小さく示されていてそんなところまできちんと整っている。しかしこれらのことをあなたは知らない。読みたくもないし封筒すら触りたくない、そう

でしたよね。もう一つ重要なことは、今回の封筒の文字は女文字、その以前の硬くて不揃いの文字とは明らかに違う

「ここまで嘖ると先生は、ゆつくりとカップを手にして美味しそうにコーヒーを飲んだ。

フツと気が抜けて硬く握りしめていた拳も緩んだ。

「いただきます」という声が少しく震えた。苦い、それは珈琲の味のせいではないだろう、溜息を一つ吐いた。

「栢原という人の本来の文字は女文字みたいに優しくて綺麗だったんだろうな、最期の封書のように。このケーキね、ここに入居者の息子さんの店からなんだ」

「はあ…最後の…先生はもう手紙は来ないと?」

「うん、手紙はね。来るのは六回目の封書を書いた女の人だよ、ただの予想だけどね」

「裕司の妻…由美…」そんな気がした。

「さあ、そこまで言い切れるだけ僕はあなたのプライバイシーを知らないのです。僕もケーキ食べてしまつたらあなたもたいらげちゃつて」

先生の顔が心なしか和らいでいるように見えた。

「このケーキ、ほんとうに美味しいですね、先生の今日の

お話以上に」

「それは重畳。おしまいに、この六回目の便りの封を僕が切つてあげます。僕は預かっている手紙を一通も開披(かひ)していません。この職にあるものとしての常識としてね。でもこの一通は読みなさいと助言したい。あなたが直接封を切れないなら僕がという意味です。ただ、承諾はもらわないとね、封を切つても読みたくなければそれはあなたの判断のままにどうぞ。いまの話聞けば、賢明なあなたはきつとオーケーを出すはずですよ」

やはりこの人には負けると、薫は大きくうなずいた。
「声に出して!」

「手紙、開けてください、承諾します」

目の前で先生が缺で一通だけ封を切り、自分は読まずにそのまま手渡ししてくれた。拒めるはずもなかった。

「話せてよかった、薫さんとは友達になれそうだ」

そう言う博士号をもつこの副院長は子どもみたいに無防備な笑顔を見せてくれた。彼はもう度重なつた手紙の謎を解いていると確信した。改めて思う、怖い人だ。

開封された一通だけを手にして自室に戻ると、すぐに掛け布団が畳まれたベッドに寝転んだ。副院長の真摯な

助言だが手紙を読む気はしなかった。たぶん彼、裕司は亡くなっている。新沼先生にあれだけ意味深に語られれば、バカでないかぎり解かる。だとすれば彼でない人間がしたためた手紙の中身にならざるに何の意味もない。長い年月をかけて傷口を瘡蓋(かさご)たで覆つたのに無理に剥がして血を出せというのか。色香無き朽ちかけの梶子でしかない我が身を、明るく輝いていたあの頃に戻して心行くまで泣けどでも言うのか。いずれにせよ、前向きな意味など何一つない。先生によれば近いうちにここに訪れるのは女だという。それはあの、非の打ち所がない恋敵田辺由美なのだろうか。それともすでに裕司が彼女と離婚をしていて後妻をもらつたとしてその女なのか。もてた裕司のことだ、妻でも元妻でもないただの愛人の可能性もある。会いたくない、とくに由美には。彼女にいまの自分を見られるのは辛い。二度も敗北を味わいたくないのだ。バカなことかもしれないが、当日何を着ればいいのか、それさえ見当がつかない。

ここまで想いを巡らせて、隣に口を開けて寝ている封筒を見た。中身を取り出して読めば空想を現実のものにできるのに、結局読む気は起きなかつた。ゆっくりと起き

上がり現実を語りたがる封筒を掴(つか)むと部屋の片隅に置かれた屑籠に捨てた。なぜだかは自分でも解らないが俄かに涙が溢れ出た。部屋の洗面器の上の鏡は比較的大きく、後退りをしていくと頭のとっぺんから膝ぐらまでの姿を映し出せる。まさに姿容だ。過去に何度か下着一枚でそうしてみたが数秒間でバストショット程度に戻した。つまり鏡に近づいた。痩せこけて鎖骨は形がより明確になり、肋骨も露わ、もちろん乳房はその佛(おまか)げにすぎない。ただなぜか顔だけはそれほど肉が殺(そ)げ落ちておらず、その分皺も目立たず、すでに大昔になった若いころの名残がある。じつは副院長室を出ようとしたとき、先生が思い出したような軽い感しで大事なことを言った。

「薫さん、月末にだが私と一緒にK大学付属病院に行こう、この近くにはあなたに必要な脳神経内科の専門医がない。車で五十キロも走ることになるがK大は私の母校でね、専門医に知人がいるんだ」

「あの、費用とか準備とか」的外れな応じ方に自分でも呆れたが、何か言葉にして病気に關する恐ろしい内容が語られるのを防ぎたかった。

「特に経費はかからない。あなたとの契約方式からして当然そうなる。準備は要らない、心と体が現地に飛べば済む。車は私物、運転は教え子の若い医者が担当する」
「分かりました、お世話になります」

「うん。いまはまだ足が弱っているだけだが、徐々に全身に拡がる難病でね、まだ十分に解明されてはいない。あなたはこのことについて特に大事な人、病の進行を何とか遅らせた。詳しいことは後日。今日は言わない気でしたがやはり早めに伝えるべきだと思つてね」

短い会話だったが重いものだった。予想はしていたものの先生が急いでいる本当の理由が怖い。早い段階で与えられた自走式兼介護式の車椅子に隠された裏の理由がいま、目の前にはつきりと顯われた。そんな気がした。
「やっぱり由美にだけは…会いたくないな」

口にしたとたん、また涙が溢れた。涙腺まで機能不全になったのだろうか、涙しながら笑っている自分がいた。

薫は江尻看護師長の依頼を受けてC棟に入居している七十六歳の磯村房枝の部屋に居た。副院長と話し合った日から三日経った日の午後のことだ。一時江尻師長が脳

軟化を疑ったというだけあって、止まらない涙の中、三十分近く話が続いているこの老女は、寝ぐせのついた髪もそのまま、はだけた浴衣風の寝間着を気にもせずベッドの上で足を投げ出しヘッドボードに背を預けている。根気よく繰り返す言葉を聞き続けた結果を大雑把にまとめれば、若くして結婚はしたものの子どもは出来ず互いに相手を罵り合つて離婚、その後、何人かの男性と付き合ひ、中には数年間同棲した相手もいたがやはり妊娠はせず、結局再婚はせずに日々食、べるための仕事に没頭して年老いた。死が近づいて自分は遺せるものが何もない女で、生きてきた意味が何一つないことに気付き、孤老を哀しみ虚しさを抱いて二度も自殺を図つたが情けないことに未遂に終わった、という内容だった。

「わたしも子どももないのよ、結婚はしたけど相手は三十も年上の人でね、好きでも何でもない人」

話が途切れた瞬間を捉え、先ずは自分も同じようなものだと目の前の老女との距離を縮めにかかった。嘘は言っていないし、その必要もない。さうに「ねえ、甘いケーキ食べない？ こゝに来る前喫茶で、一緒に食べようと思つてさ。自販機で薄茶も買つてきた、おしやべりしたく

てね、先ずはお茶しましょ」

泣き出した引き金が何かは知らないが、泣いて喚（わ）めいて、どうやらカタルシスはほぼ済んでいると踏んだ。それに甘いものには鎮静効果がある。それは経験智でもあつた。

「ねえ、どこかで会つてるよね、あんた」流した涙の跡もそのままに、意外やすぐにケーキに手を付けてくれた。警戒はしていないらしい。

「そうよ、絵手紙の会でね」と、伸縮式のベッドテーブルを勝手にセットすると、残りのケーキとペットボトルを二人分載せなおした。

「あんた、先生じゃなかった？」

「まさか、ただ人と違う絵を描くので不思議かられて何となく手伝う羽目になつただけ、いただきます」

「もしかして金目当て？ 年齢差三十の結婚は普通ないよ、しかも好きでもないってんだから」

「当たり前。わたし、手の施しようのない貧乏人だったから、親の代からずつとだけ」

「いいよ、そこまで合わせてくれなくて、あんたA棟の人だよ、嘘はシラけるし同情も勘弁」と食べかけのケーキ

をテーブルに戻し顔をしかめた。バカにするなどという反応だろう。

「何千万も持ってたってことだろう、あんた金持じゃん」

「金目当ての結婚でわたし言ったよね。予想どおり夫は持ってたよ大金、お陰様で簡単に金欠病は脱出、世の中変な拘りを捨てると楽になるって知ってたわ、私、案外ずるくて汚いの」

「旦那が死んで遺産がってことか、なるほどね、入居時に金払ってもそれ、まだ残ってるの、だとしたら凄いな」

薫とこだま苑との契約は、食費、生活雑費、施設利用費、医療介護費用など一切を含む一括払いの終身契約だった。いくら相続したと言っても、夫には先妻との間に野乃花という実子がいた。薫が後妻として入るとすぐに家を出てほとんど生家には戻らず海外で暮らしていて、じつくり話したのは葬儀の時だけというかなり濁いた関係のままでいる。

「無いわ、ほとんどすつからかん。もしここが経営破綻したりすれば乞食同然になるわ、わたし」

「ほんとなら、いい度胸だわ」と初めて笑顔を見せた。

「さっき聞いた房枝さんの話で、子どもを産めなかった

人生って何も無いに等しいみたいかな考え方は特殊過ぎるわよ。もしそうなら無駄な人生で終わる女性だらけの日本になるわ」

「あんたは一度も感じたことないの、自分の人生を振り返ってみてさあ、お金のことは別にして、それほど幸せそうに見えないけどね」

率直に突かれて否定できない自分がいる。ケーキを頬張ることで応えるまでの時間を稼いだ。正直なところ、うかつにも動揺してしまった。自分は充実した人生を送れたと胸を張れるのか。幸せだったと心から微笑むことができるシーンはあったのか。いくら無理をして自己肯定感を口にしようとも否定的な想いは排除できない。

長い沈黙で気づいたのか、房枝が頭を下げた。「誰にでも聞いていいことじゃないよね、ダメ人生のわたしに気を遣わせたみたい、ごめん」

「ううん、そうじゃないのよ」と言ったとき、まるでタイピングを打つたように看護師長が入ってきた。

「薫さん、新沼先生がお呼びなの。房枝さん、ごめんね」

予め在室二十分を超えたら機会を見て解放するからと言われていたが、恥ずかしながらほんとうに解放された

ような気がした。

「薫さん、また来てくれる？」

「うん」と応える前に看護師長が満面の笑みで大きくうなずいた。

「ありがとう、助かったわ」と、廊下に出たとたん師長が小声で言った。

「いえ、話を聞いてただけで何もしていません。それと一つだけ、彼女狂ってなんかいません、言葉は乱暴かもしれませんが、気遣いもできる人でした」

「なるほど、あなたは苑長の眼鏡通りの人でした」
予想はしていたが、案の定苑長が絡んでいた。何だか可笑しくなつて気づかれないように頬を緩めた。

ラストレターから十日過ぎたら差出人の女が来る。薫は苑長の予言を信じるようになっていた。また襲つてきた豪雨の日、薫は中廊下で田村介護士を見つけて車椅子で追いかけた。

「え？ 介護ベッドのカバーを半分にして真ん中に丸い穴を空けるの、出来るけど何それキミちゃん」と誰からも愛称で親しそうに話しかけられる彼女は、目を丸くして

聞き返してきた。無理もないとは思つたが、説明をするに長くなるし何に使うのかを告げれば反対するに決まつているので、「いいからお願ひ、カバーの損料は当然払ひしかなえてくれたらプレゼント用意して拜むから」と早々と合掌を試みさせた。

じつは、予言された来訪者が由美だった場合、着飾つてくるだろうと予想されるので何を着て応対するかにつき頭を痛めていたのだ。

「おるわよ、それって、急ぐのね」

笑顔でうなずいた、今日明日に来てでも不思議はないのだ。まるで通告でもされているような切迫感があつた。心が騒ぐ。もしかしたら自分は由美に逢いたいのかもしれない。憂鬱なのか歓迎なのかそれさえ不明だ。

「ちようどいいとこで会つた、薫さん……」

男の低い声に振り返ると施設を管理する次郎爺の顔があつた。何か言うのを躊躇ためらつている様子にキミちゃんが反応し、お辞儀を一つして去つて行つた。

「昔の恋人が亡くなつたんだってな、」愁傷様、一言それを言いたくてな」

「何で次郎爺が知つてるの？」と少しく驚いた。

「回収ゴミの中に開封されたきれいな封筒が混ざっててな、本気で捨てたのかどうか確認したくて」

そうだった、読まずに自分が部屋の屑籠に捨てた。

「読んだんだ」

「大事なものをなら捨てないだろうと思つたのと、まあ、好奇心もあつて。ま、そこは勘弁しろや」

「いいけど他の人には言わないでね」

「ああ、そこまでバカじゃないよ、ちゃんと燃やしとく、どうせいい思い出じゃないんだらうから」

やはり裕司は死んでいた。あの背高ノツポでイケメンの女好きが骨になったのか…意外にも目頭が熱くなり頼みもしないのに涙が溜まってきた。

男性的な梅雨、とでも云うのだろうか。止めば嘘のような青空が広がる。生憎すぐに黄昏時になってしまい外で日光を浴びるところまではいかなかつた。

翌日、朝食を済ませサッシ戸を開けて外気を入れ、寛いでいるとフロントから連絡が入った。外線電話で柏原由美という人が手紙でお伝えした通り、今日の午前十時頃に来苑することだった。

「いよいよか」と身が引き締まるのを感じた。裕司は他界

しているし、由美には今日限りで今後二度と会うことはない。どんな話になるのかは不明だが、もし質疑応答の場面があれば全て本音で応えようと決めた。すでに命以外失うものは何もないのだからと。

由美は予想に反して地味で単純な濃紺のツーピース姿で訪ねてきた。多少服喪の意識があつたのかもしれない。キミチャンに頼み古代の貫頭衣を作ってもらつたのだが、いざとなると冷静さを取り戻し患者は患者らしくと自前のパジャマを身に着け車椅子に乗って臨んだ。今の自分そのままでもいい、何で過度に意識するのかという反省もある。面会場所は何と副院長室、新沼先生がフロントに指示していたようで彼は早朝に出張に出かけたという。配慮の深さには本当に頭が下がる。

「？ 具体的に臨終は何時だったの？」

型どおりの挨拶を交わした後、直球で味もそつけもない質問をした。

由美は驚いたように目を丸くして何かに耐えるような感じで暫くの間応えなかつたが、「やっぱり読んでないのね、手紙」と言つて唇を噛んだ。

「封も切つてない。何通目までが彼の自筆なの？」

「五通まで彼よ、体調が悪いから中身の文章は短いけど、病院のベッドで必死に書いてたわ」

「半世紀も音信不通だった、今さらというか、死を前にして何を伝えようとしたのかな、理解不能だわ」

「そこまで言う？ 裏切つて御免、五通目はそれだけ……短いけど一番重い言葉だった、私にとつても、だつてそうでしょ、この言葉にはわたしの略奪婚への非難も含まれているわけだから」

「由美、裕司は裏切つてなんかないよ、出逢つて間もなく結婚の二文字は、二人の間で確定的に消えてたんだから」
敢えて呼び捨てにした。年下だし友たちでもない、こちらが呼んだわけでもない。五十年近くに亘つて想いの中で劣位に置かれていた自分に対する反発でもあった。

薫は相合傘で自宅まで送つてもらつた翌々日に裕司の希望で柏原家を訪問し、両親を交えて裕司と夕食を共にしている。感じの良い一家で家族の団欒とはこういうものなのだと教えられた。しだいに過度な遠慮も陰を潜め互いに無防備になった会話で自分の家族のことも面白おかしく語つて両親の笑顔を何度も引き出した。未経験の素晴らしいひと時……裕司にもその両親にもかなり近づけ

た、薫はそのつもりだった。

「バカな親だよ、薫の良さが全然解つてない、何が結婚はダメだぞ、絶対許さないだよ、また中学生たぞ、俺たち」

後日、軽い口調で両親の初対面の印象を聞かされた時の衝撃は忘れられない。しかも結婚不許可の姿勢は裕司と由美が結納を交わしたと感して私が柏原家を去るまで、十年もの間変わることはなかったのだ。ただ、息子と私が仲睦まじいことを知つても不思議に交際自体は禁じなかつたらしい。もちろんそのわけは漸く判つていくのだが。

「彼は薫さんにプロポーズはしたことないの？」

由美の声で現実の対時に戻つた。

「ないよ、私から逆プロポーズもしてない。虚しいだけだから」

「虚しい？ 言葉にしなきゃ伝わらないでしょ、わたしからみたらバカみたい」

「そうね、バカみたいでしょ。由美、あなたが柏原家の外でわたしに直接彼への想いを告白した日のこと憶えてる？ 真っ直ぐに自信に満ちて立派だったわ。あの時点でもう彼はあなたのものになったのよ」

由美は、今は強い信頼関係を築いた二人の間には入れ

ないけれど裕司を想い愛する気持ちではあなたに負けな
いと言いつつ切ったのだ。だいいち負けないのは想いの量な
どという少女趣味的な世界のことではない。家柄、両親の
社会的地位や高い教養と財力、つまり彼女が身に纏って
いる広義な意味での富裕な環境にこちらは全く敵わない
ということ、初めから勝負にならないのだ。恋愛レベルの
ことなら想いの量云々は意味がある。だが結婚は違う。裕
司の親は初対面の日にそれを感じとったのに違いない。
由美の告白を聞いたあの日あるとき、立ち尽くすしか術
がなかった。

「その程度だったの、彼への愛。背伸びして胸を張ったわ
たしを見て引き下がるなんて」と、不思議なことに由美は
がっかりしたような表情を見せた。

「お嬢さまの発想は綺麗なこと、いいわよ、そういう理解
で」

「だとしたらなぜ結婚式に来なかったの、何で黙って行
方をくらませたの、友情程度の仲だったら説明がつかない
わ」

「招待しても来ない。そのつもりで案内出してるに決ま
ってるじゃない、笑わせないですよ。うーん、これは由美に

言ってるんじゃない、裕司によ。どの面下げて参列でき
る、わたしたちは表面上十年間も恋人だったのよ、敗者には
何もくれてやるな。それは唯一無二の気遣いじゃない
のかな？　せめて由美と結納を交わす前に一言でも伝えて
欲しかった、私との関係をきっちり終わらせてから……
それさえしなかったのよ、彼は。あれほど残酷な招待状は
ないの！」

「ちよっと待って。薫さんはさつき彼との結婚は無いと
確定的に知っていたって」

「分らない人ね、二人ともそれを言い聞かせることで
男と女になることを懸命に抑えていたの！」

「変だわ、そんなの。親の言いなりってことじゃない」

「結婚して長いのに裕司のこと、分かっちゃいないのね、彼は
そういう人でしょ、親の希望に添い柏原家の長男として
家財産を継ぐ、それに縛られることで将来の安泰を図る。
冒険のボの字もできない性格なの」

「険しくなっていた由美の目が少し和らいだ。老いても
お嬢さまのまままで真っ直ぐなのだ、自分の対裕司の自信
が揺らいだのかもしれない。ところが彼女は、はず斜めの
反証を口にした。

「冒険はしたわよ、何度も。相手はそのたびに違うけど何回も浮気をしたもの」

これには思わず大声で笑った。ちようどこのタイミン
グでドアをノックする音がして看護師長が入ってきた。

「楽しそうね、羨ましい。薫さん、副院長からなの」と言
つて小型の配膳車を中に引きこむと、師長自ら珈琲とチ
ーズケーキ、紅茶と苺のショートケーキをテーブルに配
し、小物に至るまで揃えて、まるで喫茶店に居るような形
にしてくれた。

「いいわねえ、古くからのお友だちって、わたしなんか看
護、介護一筋でやってきたらいつの間にか一人ぼっちに
なってしまうって。あら、こめんなさい、個人的な愚痴を」

笑顔をつくって出ていく師長を見て薫は慌てて立ち上
がり、深々と頭を下げた。

「なぜ由美の好きなケーキを？」

「あ、わたし、着いたときにフロントに居たスタッフさん
から訊かれてる。きつと施設内に喫茶コーナーでもある
のかと思って」

「こまで気を遣われると不思議に思わざるを得ない。
しかしいまは大人しく厚意を受けておこうと思った。」

「あるわよ、喫茶、でもスタッフも入居者も利用するから
いつもいっぱい」少なくとも旧知の二人がゆっくり話せ
る環境ではない。

「薫さんは今でも凄いのね、びっくり。経営者には手厚く
配慮され、スタッフにも人望がありそうだし、どこへ行っ
てもそういう立ち位置になる人なのね、きつと」

薄っぺらなお世辞ではなさそうなので少し嬉しくなっ
た。由美は出会った当時からだ人が柄もいい。老いても変
わっていないことに感動すら覚えた。

「ところで由美、正直なところ何をしに来たの？」

受けた好印象とは無縁のきつい言い方をした。そろそ
ろ本題に入りたかったのだ。

「ずいぶん言い方ね、自分でも意外に思ってるから解
かるけど」そう言うと由美は、しばらく紅茶を手にした
り、ケーキに載った苺を摘んで美味しそうな顔を創っ
たりしながら言葉を発しなかった。

きつと自分の気持ちを整理しているに違いない。そう
解釈して自分も珈琲を味わうことにした。

「知りたかったのよ、あなたという人を。裕司とあなたの
本当の関係を。だってそうでしょ、結婚後半世紀近く一

緒に暮らしてきたのに、死が間近に迫ったとき、傍にずっと私がいるのに、あなたに会いたいと、返事も来ないのに何度も何度もベッドの上で、不自由な手で手紙を書いて私に出してきてくれとせがむのよ、書き損じた便箋の数は生きたその何倍にもなるわ。必死、わたし、その言葉の意味を初めて知ったわ。だから本人の前で声を出して泣いた、なせなのって、私と薫さんで何が、どこが違うのって、バカな質問を繰り返してね」

語り始めてすぐに目に涙をためて、終にはぼろぼろとこぼし始めた由美。俯いた表情、ほつれた髪、年下だといっても、それはたった四つでしかない老女なのに、なぜ彼女には色香が漂うのか。若いころに感じた御しがたい嫉妬が、いまなお現実のものとして押し寄せてきた。さらには急に、若い頃の裕司と由美が、言い換えれば美男と美女が夫婦の営みで絡まっている光景が頭に浮かんだ。

「子どもは？ できたの？」

「えっ？」と由美が顔を上げ、「薫さんは？」と問いに問いをもつて返してきた。

「子どもなんて欲しいわけじゃないでしょ、お金目当てで三十も違う歳の差婚をしたわたしが」

「ごめん」

「由美、そのごめんは思いがりよ」

「あ、ごめん。その人のこと好きだったんだ」

「好きだの嫌いだの、恋たの愛たの、そういう雲をつかむような抽象的なものは裕司とのことでお終いにしたの、バカバカしくてね」

由美が目をぱちぱちとさせている。

この程度の話で驚く歳でもなからうにと、自分の中の不思議なものに振り回され見方がきつくなっていた。

「できなかつたの、けっこう頑張つてみたけど」

由美も刺激的なことを平気で言える歳ではあるらしい。「私と裕司の関係性って言つてたわね、ほんとうのところは自分でもわからないわ。彼もきつとそうだったと思う。男と女つてそういうものなんじゃないの。難しく考えるのやめたら、彼はもう物故したんだし」

「男と女ではあったんでしょ、彼とはしたの？ セックス。恋人だった人にバカな質問だけど」

冷めだした珈琲を呷（あお）って真正直に答えた、「一度だけね、知り合つてから五年後だったかな、私が借りていたボロボロの部屋でね」

「たった一度…信じられない」

「別に信じてと、お願いはしてないわよ。男女の関係って百人百様、百組百様でしょ、それにセックスした回数と愛情の深さが常に正比例するわけでもないし」

「違う。あの初めての心身の悦びを何度でも味わいたかった。それでも二人ともまるで戒律でも護るようにして自制し続けた。破ればどこまでも男女関係は深まり、さらには妊娠をするかもしれない、そうなければ彼の両親の力で破砕され、十年もの長い交際はできなかつたと、そう思う。」

「だったらなおさらのこと、知りたいのよ、薫さんとの関係に彼が求めたものを、これって変？」

「変じゃないけどもう知っても無意味よ、もう彼は骨になつたんでしょ、何度も言わせないで、由美、ケーキちゃんと食べてね。施設の人には由美のこと、素敵な旧友って言い続けてもらいたいから」

「うん。あ、もう帰れってことね、解かつたわ」

「そう言う由美は、フォーク使うことなく手づかみでショートケーキを口に運んだ。濡れた睫毛が何とも儚げで六十六の老女には見えず羨ましが募つた。」

「また来てもいい？」

「引いたドアを手で押さえて振り返ると、彼女は意外な言葉を口にした。」

「いいけど予め施設に電話して私が生きてるかどうか確認してからにしてね。わたし不治の病なの、まじめな話。来て見て、パジャマ姿に車椅子、充分解つたでしょ、あのころの立花薫の現在が」

「ううん、まだ…じゃ、またね」

由美が手を離すとドアがゆっくりと閉まつた。

外まで送つてやりたかつたが、その間にスタッフが片付に入ることが予想されるのでやめた。そこまでもらう訳にはいかないと、内部の礼儀を優先させたことになる。器類をトレーに集め、椅子やテーブルを元に戻し終えたとき、突然抑えていた感情が高まつた。

「違う、最低！ 何が本音で応えるだよ、かつこばかりつけて全然違うじゃないの、当時の、自分への嘘、卑屈さの爆発、醜い嫉妬、自暴自棄に陥つての逃走…」自虐の言葉が、漸く声を落とし、黙ること、止めようとしても次々に押し寄せてくる。終には熱い涙があふれ出て、子どものようにしゃくりあげた。それでも「みつともない」とつぶや

いてドアまでよろよろと歩き、ロックをした後で背をドアに預け、そのまま床までずり落ちた。なぜこうなるのか、薫は自分だけが知っている本当の自分への嘘を想って泣いた。

「笑えるわ、また負けた…」

「西浦君、行く、K大付属の福田君にも到着予定時刻を知らせてある」と新沼副苑長がこの日の運転を担当する若い医師にゴーサインを出した。

「先生、一時間ほどで着くと思います」

「…だそうだ。薫さん。後部シートに二人で並んでる。いろいろ話すには時間も場所も十分な条件だね、何かあるんでしょ、訊きたいことが」

薫は緊張した面持ちで「はい、お願いします」と頭を下げ、すぐに協力してもらった柏原由美との面談の内容をかいつまんで話し、亡くなった裕司と自分の間のどちらかというと変則的な恋愛の経緯を時系列に従って伝えたいなるべく時々感情などには触れず客観的な事実を心掛けてもいる。必要を範囲で自分の生い立ち、家庭環境にも触れている。カウンセラーでもある新沼先生のこと、そ

れで充分省略した二人の心の動きまで洞察してくれるだろうと思っただのだ。

「すべて単刀直入に訊くけどいいかな。薫さんは、裕司さんがあなたとはなく由美さんとの結婚に走ったこと、それ自体には納得したんだよね。だとすると、彼らに祝福を与える言動に出ず、いわば恋愛現場から失踪した本当の理由は何なのかな」

のつけから正鵠を得た質問で驚いた。もう正直に答えるしかない。当然なのだが或る種の覚悟を求められているような気がした。

「二人が結納を交わしたタイミングをみて自分の十年に亘る彼との交際が嘘まみれだと解かったからです」

「ほう、では彼が他の人との結婚を告げるタイミングで好ましかったのは何時だったの」

「二次試験のずっと前か、受験の最終結果がわかったあとですね」

「いったいどんな試験」

「三大国家試験の一つで、当時は三万人の受験者で最終合格者数は四百五十人前後という難関…」

「なるほど、そういう答え方もあるね。で、短答式、論文

式、口述式の三段階のど「まま」進めていたのかな、結納があつたとき」

試験の名称を言わなくてもこの先生は解かると思つていたが、やはり期待を裏切らなかつたようだ。裕司が纏う優位性に少しでも近づこうと、二天国家試験は全て受験していた。結果的には、当然のように全て落ちたが、対裕司的には、無理を承知で頑張るといふ姿勢自体に意味があると思つていた。何ともバカな発想だが、諦めつつも一緒に暮らすという願望だけは捨てたくなかつたのだ。

「二次試験の第一段階に合格で第二段階の試験まであと半月というところでした」

「うん、それなら辛いね、悲報という感じになる。で、薫さんが通過した段階で受験者はどの程度絞られたわけ？僕は医学部で文系の試験はそれほど詳しくないから敢えて訊くんだが」

「十パーセントまで絞られます」

「そうなら邪魔をされたとも受け取れるね。例えば合格されると、彼の「両親が薫さんと息子の結婚を全否定しずらくなるのか」

話を聞いてみると、彼は何ですか親の言いなりで情け

ない男みたいですね」と運転中の西浦医師が口を挟んだ。

「親の希望に添う、それ自体は別に普通だと思ひますが、家柄を揃えたいということも含めて」

「はははは、これは失礼。あなたの感情に添うコメントかなと思つたんだけど」と西浦先生はハンドルから右手を離して「もう、黙ります」と頭を掻いた。

「こちらこそすみません、今のは齢を食つてからの考え方で、当時としてはおつしやる通りの苛立ちには確かにありました」

薫は、恋に破れ、無一文に近い状態で金欲しさに歳の差婚を選び、何不自由無い生活の快適さを初めて経験して彼の両親は同様の生活環境下で、家もない親もない貧しい小娘を危険な者として見詰めていたのだと感覚的に解かつたのだった。

「確認だが、じゃあ薫さんは法曹になる可能性を得れば彼と一緒になれると信じていたのかな」

やはり目指していた資格は確実に捉えられていた。

「いえ、それは無いと思ひます。ただ大反対にくくはなるかもしれませんが」

「とすると、解釈に迷うんだが」と新沼先生は顎を上げな

がら小声で言った。呆れている様にも見えな

「打撃を受けた直接の原因は試験の半年ほど前にももらった彼からのラブレターにあつたんです」

それは、裕司が由美以外の女とも関係し薫にはもう結婚どころか女友立ちとしても興味が無くなつていて感じていた時期に送られてきた手紙だつた。

「先生、カウンセリングのご参考になるようでしたらお読みになりますか？」と裕司からの問題の封書をバッグから取り出した。なぜか破棄はしなかつた、裏切りの証拠として持つていたかつたのかもしれない。

「薫さんの人生観を変えた一通か、拝読しよう」
「鑑定のもりでお願ひします」

生れて初めて目にする激しい愛の告白、そう言つてもいいかもしれない。両親の意向に添うという縛りの中で普通の男女間の交際が出来ない辛さを語り、一度だけの性体験のすばらしさを懐かしみ、二人してどこかへ落ちていきたいと言つた。ただ、その後で矛盾ともれる「囁き」がしたためられていた。僕より好きな人がきたら僕のごとは構わずに忘れて幸せを掴んで欲しい、もとより僕も同じようにそうするからと。もっともラブレターと解

して手にしていた薫は、但し書きのような部分を軽く受け流していたのだが。

読み終わると先生は一つ溜息をついてから言つた。

「先にあなたは僕に構わず自由にしたいと伝えておいて、刺激が強い繰り返しは避け自分もそうするからとこつそり伝える。なるほどね、手練れだね彼は。つまりこの手紙を書いたときはもう由美さんという人との結婚が具体化していたわけだ。そう、電撃的な結納の伏線が張られていたんだ、この手紙で」

表向き友人としての男女交際だつたとしても、いや、友情なら友情でいい、事前に一言あつて当然なのに手紙で宣告した通り私のことはもう忘れていたらしい。由美との結納を感じ取つた日の夜、薫は惨めさと悔しきで泣いた。追つて辿り着いた披露宴の招待状など茶番でしかない。

「やっぱりそういうことですよね」

確認したからと言つて何がどうなるということもない。彼が息をしている生活環境から突如失踪した半世紀前の自分の行動が免罪符を得た。「愛の手紙」はそれ以上でもそれ以下でもない。

「先生、結局当時の彼とわたしは自分の本音に蓋をして恋愛ごっこ、親友ごっこをしていたんです。年若いて初めて理性でそれを確認した。そんな気がします。少なくともわたしは、裕福な家庭に出入りしたり、美男で頭も良い男性と付き合っていることで、自分の出自や学歴や容姿の対するインフエリオリティーコンプレックスから解放されたかった。合格という先など見えない国家試験を受け続けていたのも同じこと。まるつきり嘘まみれの青春の中に居たんです。彼と由美との結納はわたしの心の遊び場を取り去った。そんなふうで考えられるようになりました。愛たの恋たの騒いでいたくせに、早速お金目当ての歳の差婚に飛びついたのがその証拠というわけです」

独り言のように話しているうちに頬が涙で濡れていた。気が付いた先生が横からそっとハンカチを渡してくれた。「かなり辛辣だが理性的な分析だね。でも、嘘の勉強で二次短答式合格は不可能だよ、嘘や虚構でない青春の熱い心も肯定的に見詰めないよね」

「たとえ論文式に合格してその先の段階に進めた可能性があつたとしても、勉強や生活するためのお金は実際ありませんでしたし、頼りになる親兄弟も無く金融機関の

信用も得られない暮らしぶりでしたから。これ一つとっても受験などのつけから幻に等しかたのです」

「じゃあ失踪してどこでどう暮らしていたの」

「衣食住がとりあえず手に入る職場、住込みの旅館です、観光地へ飛びました」

「そうか、年高の金持ち男はそこで、というわけだね」

「はい。自暴自棄になっていましたから気に入られたのを幸いに十日ほど宿泊して帰るその人に付いて行きました。最初は家政婦としてですが」

「まるでドラマのようですね、薫さん」としばらくの間運転に専念していた西浦医師が、大きなため息をついた後で言った。

「幻といえは裕司への恋心も途中で消えていたかもしれない。その後の受験への動機は見返してやりたい、そんな風に変化していたのかも。これも年若いからの自己分析ですけど」

知り合ってから六年ほど経った頃、裕司が由美とも違う他の女とラブホテルから出てきたのを柏原家に入入りしていた女性に目撃されている。耳打ちされたときはショックだった。また、彼の誕生日に数人の友人たちが柏原

家に泊ったことがあり、酔いつぶれた彼が心配で真夜中に寢室を覗いたことがある。ベッドで全裸ではないが由美とかさなって眠っていた。「わたしも泊まっているのに普通そこまではするかよ」と、薫は即刻一人で柏原家を出た、たぶんそれから心の底の部分が変わったのだ。

よく考えれば当時彼を責めることもしていない。自分が裕司に恋心を抱いていた女だと判定できないことは明らかだ。むしろ嫉妬に狂わなかった自分の方が怖い。

ぼそぼそと話し終えたとき新沼先生は、まるで薫と裕司の複雑な感情を総括するような言葉を口にした。

「どうやらあなたも彼も、自分に無いものに魅かれ求めあつていただけかもしれないね。普通の恋のように相手に対する独占的な想いではないし、爆発的で一時的な性欲や感情のつながりでもない。そう考えると死が間近に迫った彼が、傍に妻の由美さんが居るのに薫さんに会いたがった心の内が理解できる。あなたが彼の手紙を受け取ることを頑(かたくな)に拒んだこともね」

先生は、まるで聞き手としての自分自身に説くように長々と分析を続けた。

裕福な両親のもと乳母日傘で育った彼、裕司は、父母を

亡くし、借家暮らしの祖母以外ろくな保護者も無く貧しい生活の中で独り気丈に生きる薫に魅かれ、恋人のように傍に居てもらうだけで、自分自身は何の努力もせず豊かな暮らしを手にはしているという後ろめたさを払拭できた。それでも結婚は両家の釣り合いを重視するので由美を選んだ。ところが一人とも同じ環境下で育ち、好い意味で刺激し合う何ものもない。彼はずっと薫さんを意識して生きていたに違いない。

一方、貧困に引きずり回されている薫は努力するといふ一つの才能に全てを賭けて独り生きてきて、自分とは無縁の環境下にいる彼との交際で抱えている複合感情をコントロールしていた。それが明確に壊れたとき、彼とは真逆に全く違う心的変化を経、裕福な相手と結婚することで彼が身に纏っていた世界を手に入れた。つまり彼の存在意義を極限まで小さくすることに成功したのだ。半世紀もつながりが切れていた男の手紙など誰が読みたいと思っただろう。彼のラブレターによる裏切りへの衝撃がその想いを補強したに違いない。ただ、薫は夫の遺産で裕福さを継続し、さらに年老いて気づいた、青春時代、自分の本音に蓋をして、自分にまで嘘をついて心の平穩を

保っていたことを、どこかで「金」に支配されていたことを。それに気づいた薫は新しい生活環境を欲して大きな決断をした。もてる金の殆どを手離して施設と終身契約をしたのだ。しかしその動機は彼への想いの復活とは無縁のものだった。手紙の拒絶はそれを物語る。

「とても解りやすい分析ですね」真つ先にそう口にしたのは西浦医師だった。

「今まで自分の中でモヤモヤしていたものが整理されて救われる想いです。どこまでもおっしやる通りだと思いますが、一つだけ、こだま宛に入った動機はそれだけではありません、健康に自信が持てなくなっただけです。万一の場合、頼れる身内は誰一人としていませんから」

「うん、前回の健診の問診でそれが現実のものとして我々にも症状として確認できたわけだが……」

「先生、何という難病の兆候でしたっけ、難しい名前前で病名を忘れてしまったんですが」

「西浦君、君の研究領域だ、頼む」

「駆け出しの、ですが。筋萎縮性側索硬化症という厚労省指定の難病の疑いです。確かに覚えにくいのでアルファベットでALSと憶えてください。薫さんの場合、また初

期症状しかも早期の段階でいまは足だけです。進行が速くなれば体全体の筋肉に及びり痩せて力がなくなつていきます。しかも進行を完全にはめることは出来ません。根本的な原因はまだ解明できていないのです。ただ進行を遅くしたり症状を弱めたりすることは可能ですので、今日訪ねるK大附属病院の脳神経内科で検査を受けて、そのための対策を具体化しようとしている訳です。あ、筋肉の問題なのに何で脳神経内科なのか不思議かもしれませんが、この病気が脳と脊髄にある神経細胞、運動ニューロンの障碍だからです。詳しくは検査と同時に説明があると思います」

病院に着くと新沼先生は学長との面談のため一時別行動となり西浦医師に伴われて脳神経内科の福田医師の許へと向かった。検査は問診、視診、触診のあとで、筋電図の検査、脊髄のMRI検査と続いて、最後に綺麗なイラストを使つての病気の解説を受け、思ったより早く終わつた。

西浦車で新沼先生共々こだま宛に送り届けられたのは午後四時、自室に戻る前に副院長室へ招き入れられた。驚いたことにテーブルの上にはうな重と思しき漆黒の箱と

お茶セットが並んでいた。

「いやあ、お疲れ。お昼が遅れて悪かったね、食べよう。少しあなたに話があつてね、いや、車内の話の続きみたいなものだけど、お願いも併せてね」

そう言うのと蓋まで開けてくれてお茶を淹れだした。こちらは遠慮もあつてどうにも対応が遅れがちになる。昔風の女としても格好がつかない。少し意地悪なことをしたくなつた。

「先生、ううん、副苑長先生、福田先生から説明受けました、どうしても全幅の信頼を寄せてくれていろいろ薬の治験に協力してくれる人が必要だと、服用して体になんな作用があつたかを客観的に語れる知性を持った初期段階の患者さんが欲しいと。間違いありませんか」

割り箸を握つたばかりの副苑長が天井を見上げて言った。「薫さん、誤解しないで欲しい、だからというわけではないんだよ。これからたくさん罹患する人たちのためにも…いや、感謝の気持ちがある…」

「そういうこと、には変わりはない…」と山椒の入った透明の小袋を手にしたからため息をついた。

「初めて口にするんだが、隣の広大な土地にね」

「はい？」突然土地の話かと訝（いぶか）つた。

「もうすぐ平屋建てで市宮の大規模養老施設が出来るんだが、そこそこだま苑がとりあえず一部協力し合う関係になる。一例をあげると、あちらに設置されるレントゲン設備、CTスキャン、MRIなどが共同使用となり、その代わりと言つては何だが、内科の苑長や整形外科の私や今度来る脳神経内科の野田君、それに看護師、介護士など必要に応じてあちらを応援するという関係になるんだ。

このプランの先には第三セクター化があるんだが、これはうちの入居者にとつても利益大だね、薫さんをお願いした臨床的な学びも大きな意味を持つことになった」

「なるほど」自分は両施設のギブアンドテイク関係のちようど狭間にいるのかと合点がいった。

「薫さんはお金が無くて青春時代に目指したものをすべてを失い、そこで変異を遂げて結婚でお金を手にし、老いてお金を手元から離すことで本来の自分を摸索した。私が思うに、いま苑内で日々自分以外のもののために無償で動いているあなたが、長年に亘って自ら未開封にしていた本来のあなたの姿だ。これは疑う余地がない。だからこそあなたに頼めた、いや頼みたい」

「先生、私の尊敬する新沼先生、もういいですよ、全面的に協力させていただきます、こんな私が今できる唯一の社会へのアプローチでしようから」

「ありがとう、薫さん」と副苑長先生が頭を下げた。

理性を手練つて納得をしながらも溢れてくる涙を止められなかった。

それを見つめている先生の目が優しくかった。

「いつなんどき終わるか分からない命なんですよのね、わたし」

「いや、しかしそれは誰でも」

「手も足も、あちこち動かないわたしになっても見捨てないで見てくださいね、先生」

箸を止めたまま大きくうなずく先生を見て、ほんの少しだけ笑う真似を試みた。

そのときノック音とともにドアが開き、キミチャンが顔を出した。「ごめん、C棟の淳子さんに師長が捕まって動けないで困ってるの。薫さん、行って淳子さんの大いなる愚痴聞いてやってくれる?」

「急ぐのね、解かった」とすぐに車椅子を操り、「どちらさま」を口にした。

うなぎの蒲焼は、ほとんど手つかずの姿だった、扉を開けたまま押さえて待つキミチャンの視線がテーブルを捉えて動かない。

新沼先生がおもむろに取り残された弁当の蓋を手にするのが何となく可笑しかった。

「行つてきまあーす」

それは戻つて来て食べますという入会図でもあった。